

科学研究費成果報告書「日本近代史料に関する情報機関についての予備的研究」（基盤研究（B）（1）、平成9・10年度、研究代表伊藤隆、課題番号：09490005）より

4 原 朗氏

はら あきら 東京大学・経済学部・教授

日時：1998年2月19日

出席者：伊藤 隆 勝村哲也 季武嘉也 村瀬信一 梶田明宏 小池聖一
西川誠 中静未知

伊藤 先生からいままでのご研究の中での史料というようなことで、お話をいただくと思ってお願いをしました。適当な時間お話をいただいて、あとは質問をさせていただくなり何なりいたしますので、2時間お話をしてくださっても構いません。

原 原でございますが、どうぞよろしくお願ひいたします。

いま東大の経済学部におりまして経済史の勉強をしておりますが、私が担当しておりますのは現代日本経済史という講座でございますが、私はもともと経済学部を出ましたものですから、いまは歴史の勉強をしておりますけれども、実は歴史についての専門的なトレーニングを受けたことがございません。

現代日本経済史をやることになったのも誠に偶然といえますか、最後に史の字がついているのを僕は忘れていたんですね（笑）。現代の日本の経済のことを勉強したいと思っておりまして、その現代日本経済史って全部入っている先生のゼミがありましたので、それに入れていただいた。ところが、端からそういう考えですから歴史ということをちゃんと考えておりませんで、1度その大先生に叱られまして、「原君、経済史は歴史なんだからね」ということをきつく言われました。それまで全然そんなことは考えていなくて、経済の理論の勉強をしておけばいいだろうなんて思って、理屈ばかりピークパーク言っておりました。それで、はて歴史とは何だろうか悩んでしまったら、これが全然わけが分からなくなりまして、それで1年ほど余分に時間を使って歴史の勉強をしなければと思ったわけです。

経済関係の資料の話の話を申し上げるよというのが伊藤先生からのお話でございまして、いろいろ考えましたが、私が昔どういう資料を見ていったかという、そういう話を申し上げることしかどうも私にはできそうにございませんので、それでお許しいただきたいと思っております。

そんなわけで歴史をやるつもりもなく経済史の世界に飛び込みまして、いちばん最初に資料らしいものを見せていただいたのが多分、学部の3年のときのレポー

トを書かなければいけないことになりまして、その怖い先生に出さなきゃいけないものですから多少は歴史っぽいものをと考えたんですが、どうしても現代をやりたい。現代というのと歴史というのと両方ついている妙な講座でございますので、現代のほうを強調しようと思ひまして、第2次世界大戦後を歴史としてやるのだということをお子供なりに考えまして、そして選びましたテーマが、企業再建整備とか金融機関再建整備というものでした。

これはどういうことかと申しますと、要するに、戦前の日本の企業が太平洋戦争中に殆ど全部軍需産業になってまいります。日本全国あげて一大航空工場にするような勢いですから、みんな飛行機工場とか、その機械部品工場とかになります。そうしますと、戦争が終るとパタリと何も仕事ができなくなってしまうので、殆ど全ての会社が倒産する。そういうふうには戦争が終わったときに倒産しては困りますので、戦時中に政府は約束をいたしまして、戦争が終わってもちゃんと補償するから、こういう設備を入れなさいということをお各会社に命令していたわけですから、その戦時補償というものを実行させないと日本中の会社が全て倒れます。

ところが、この戦時補償をお大蔵省は実行する気だったのですが、日本は明治以降借金をして返さなかったことはございませぬので、その原則は守るといふのが大蔵省や日本側の官吏の立場でありましたが、これは払ってはおならんといふのがGHQのマッカーサーの命令でありました。結局、戦時補償は払わないといふ……払うことは払うのですが、税金として100%の税率でそれを取り上げるといふ、これは戦時補償特別税といふものですが、払うものは払うが取り上げるものは全部取り上げるといふ、結局払わないわけで、会社としては潰れるわけでございます。全ての会社が潰れますと、それにお金を貸していた全ての銀行が潰れるといふことでありまして、いまよりもっとたいへんなことになるわけでありませぬ。

そうしますと企業といふのは、不良債権といひませぬか持っていてもおこれからは到底駄目な資産は、これは旧勘定としてそちらに凍結してしまおう。ひとつの会社が旧勘定と新勘定と2つ作りまして、そして旧勘定のほうに不良債権を全部移して、新勘定といふのは、その会社を再建した会社——いわば第2の会社が運営できるようなものだけでいこうといふ、そういうことをせざるを得ないといふことになりました。戦時補償打切りと同時に企業の再建整備。さらにそれにお金を貸していた金融機関の再建整備といふ、一斉にこれをやらなければいけないといふことになったわけですから。

実はこの再建整備関係の資料は、そのときには見つかりませぬでした。そのずっとあとで見つかることになったわけなんですけれど、そのときには私はまだ学部の学生でございませぬから、上手くそういう資料を見つけることができませぬで、や

っとたどりついたところが大蔵省の文庫で、学部の子供には見せないとおっしゃったのですけれど、それでも何とか見せてくださいとお願いして、何ヵ月か大蔵省の文庫に通って、その再建整備のレポートを書いたというのが、ちょっと資料めいたもののお付き合いの初めだったわけです。

伊藤 大蔵省の財政史室ですか。

原 ではございません。財政史室はまだその頃は今のよう形ではありませんでした。文庫というのがございまして、これは国会図書館の分室ですから見せてくれていいはずなんですけど、そのときはなかなか見せようとしませんでした。まだ閲覧の形が整ってなかったんじゃないでしょうかね。省内の方はもちろん使っておられたんですが、子供が外からやってきたからといって見せるような時代ではどうもなかったようです。

伊藤 その文庫というのは、いまでもあるんですか。

原 あります。

伊藤 それは財政史室とは別にですか。

原 はい、別にございます。これは国会図書館の大蔵省の分館というのが建前なんですけれども、大蔵省も閉鎖的でした昔はなかなか見せてくれません。

伊藤 あれは裏表というわけではなくて、別に文庫というのがあるわけですか。

原 はい、あります。これも公開されているべき性質のものでありますが、運用上いまはどうなっていますかね。その頃は僕は太分恩に着せられました。先生の紹介状をいただいたり、太分汗かいて見せてもらったというのがそのときの記憶です。

ただ、割りに面白い資料にそのときはぶつかることができたので、レポートとしてはまあまあかなと思ったんです。ただ、これは私の手許にいまございませんので、どんな資料を見たかちょっといまは確認できないんです。先生のお手許にあって、そのままどこかにいってしまって、ちょっとそれは残念だったんです。それで、先生がお亡くなりになってから資料の整理も私がいたしましたけど、他の人のレポートはいっぱい出てきたんですけど、僕のだけないんですね。どっかに先生が持っていってお喋りか何かに使われたのかも知れません。

それが3年のレポートのときに見た資料で、4年のときにはテーマを変えまして、去年からちょうど70年前ですかね、1927年の金融恐慌という……去年は北海道拓殖銀行が潰れたり山一も潰れて経済史に残る年でありましたが、その70年前に日本全国の銀行が全て休業するという金融恐慌が起こったことはご承知の通りでございまして、例の幣原外交打倒で枢密院がはりきったときであります。そのときに銀行法という法律ができて、これは恐慌が起こる前から、いま銀行が危ないから資本金制限をきちんと入れて、100万円以上のお金を持っていなければ銀行などと名乗ってはならんとか、大都市では200万以上の資本金を持っていなければ銀行

と名乗ってはならんという法律ができて、それで増資を許すかといったら増資は許さない。小さい銀行は100万円以上になるように合併しなければいけない。5年間の猶予期間をやるから、その間に全部合併しろという銀行法ができました。この銀行法の影響をテーマにしようと思いました。

日本銀行の調査局が出した、『日本金融史資料』という経済関係の印刷された資料集としては非常に重要な資料集がございます。私は『明治・大正編』というのだけが刊行されているときに勉強を始めまして、ご承知の方も多いかと思いますが、『日本金融史資料明治・大正編』の第22巻に『金融情勢特別調査』という巻がございます。10cmぐらいの厚い資料集……といいますか、日銀の調査ものですね。第1次欧州大戦のときに日本の経済界・金融界がどうだったかというレポートから始まって、大戦後、それから震災後、金融恐慌に至るまでどういうふうなことが起こったかというものでございましたが、私は教養学部でお世話になった先生からのご命令で、そういう勉強をするんだったら第22巻を最初から最後まで読まなければいけないということを言われました。そういうものかと思って、そこでカタカナを読むことに慣れまして、カタカナのほうの読むスピードが早くなったのは、その先生のおかげだと思っております。

それで、それをしましたときに『昭和編』が出始めまして、最初の1巻から4巻までが大蔵省銀行局年報の復刻でございました。その銀行局年報の数字を見ますと、各府県別に全ての数字が揃っております。それで、その銀行法の5年間の猶予期間の間に銀行の数がぐんぐん減るわけでございます。そうすると減る前と減った後でどう違ったかということをやれば、昭和初年の銀行集中が引き算をすれば変化が分かるはずであると非常に単純素朴なことを考えまして、足し算はあまりやらずに引き算をやって（笑）、あとはパーセンテージをはじくために割り算をすると。引き算と割り算で論文をひとつ書こうと思って「昭和初年の銀行集中」というのを選びました。

そのときには地方銀行協会という協会にまいりまして、まだ『地方銀行小史』という小さな本が出たばかりで、地方金融史の研究はあまり進んでいなかった時期ですが、幸い地方銀行協会がいろんな地方銀行の頭取さんにお話を伺ったテープの起こしたものを読ませていただくことができました。地方銀行協会に半年行きまして一生懸命そういうのを読ませていただいて、これは資料というよりは統計いじりのようなことになりますけれど、統計も経済にとっては非常に大事な資料のひとつでございまして、銀行局年報を足場に地方銀行関係の資料をあたったというのが、学部の四年のときの私のやろうとしていたことでございます。

この論文はどうしようもない論文に結局なりまして、悪戦苦闘して数字から筋を捻り出そうとしたんですが、筋ができていて数字を使って説得するというのが上手

い大内力先生のような頭のいい先生はいらっしゃるんですけど（笑）、数字から筋を掴み出そうとするとなかなかこれはできません。私の論文の結論は『以上によって分かりませんでした』と（笑）。それを見た先生が笑い出しまして、「まあ、これは大学院に入ってからやれ。いまのお前に分かりっこない」というふうにおっしゃってくださったものですから、すれすれで大学院に入れていただくことができた。これが2つ目の資料——つまり、地方銀行協会で地方銀行関係のいろんなヒアリングの記録でありますとか、その他のいろんな金融統計に関するものを勉強いたしました。

伊藤 それは、その地方銀行協会というところがかなりデータを持っているわけですか。

原 ええ。その頃としては割りに持っていたほうで、いまは地方金融史研究というグループができて、雑誌もございまして随分研究は進みました。その頃は『地方銀行小史』を執筆された3、4人の方しかご存じなかったと思いますね。でも、これはなかなか面白いものがありました。

それで、大学院に入れていただいたのはいいんですが、金融恐慌のところをやったら全然分からなかったということでまいっておりますので、仕方がないからその次の時期をやろうというので、高橋是清の資料を追いかけようと思ったわけでございます。高橋財政期の研究をしようということをして修士論文の目標として考えまして、これは一生懸命追いかけたのです。いろんな噂がございまして、僕のところにその頃聞こえておりましたのは、柳行李に3箱、高橋是清資料があるというチャーミングな話がありまして、これを追いかけようというので、まず高橋家から始まりまして、中野の刑務所の近くにあるはずだという情報とか、都立大にあるはずだという情報が（笑）……

伊藤 これは本当にあるんですよ。

原 というわけで追いかけたんですが、そのときには見せていただけたところまで行かなかったわけです。僕自身としては分からなかったわけです。

伊藤 いや、いまでも分からないんですよ。

原 いまでも分からないでしょう。ですから、それはまだチャーミングな話としてもしあれば（笑）。

伊藤 『高橋是清自伝』を見ていると、いろんな史料が大量に残ってる残ってるはずですね。

原 そうなんですよ。だから、日露戦争のあそここのところまでとても面白い自伝で、あれがあとまであったら非常に面白いと思うんですけど。上塚司さんという秘書の方とか、いろんな方を……

伊藤 一緒に行きましたね。

原 ええ。伊藤先生にもリードしていただきながら、随分いろいろ是清さんのを追いかけてきたんですけども、これは結局、修士2年目の夏になっても資料がないわけです。修士論文は2年間のうちに書かなきゃいけないのが絶対のルールで絶対絶命困っておりましたら、そのときにお目にかかることができたのは、私にちゃんと片仮名の資料を全部読めとおっしゃった中村隆英先生がご一緒してくださいまして、泉山三六さんという昔の大蔵大臣の方にお目にかかることができました。それで「午前7時に俺の恵比寿の家に来い。そうすれば話してやる」というので、先生に毎朝お願いをいたしまして、私は重いオープンリールを持って……

伊藤 でも一応、ポータブルとってますがね（笑）。

原 ポータブルになったと言って我々は喜んで、それを持って行ってお話を伺ったわけです。それでしばらく伺ってありましたうちに、「いやあ、資料が熱海の別荘に置いてあるから、今度送らせてここで見せてやるよ」とおっしゃいまして、泉山邸の2階にその資料を広げてくださったのを見た途端に中村先生と私の膝がガクガク震えまして、例の日満財政経済研究会という石原莞爾が作りました私的な機関で、日満軍需産業5ヵ年計画の立案のもとになったものがぞろりと出てきたわけがあります。その頃、公刊された現代史資料は多分、みすずの現代史資料のシリーズももちろんございますけれども、『太平洋戦争への道』の付録の資料編というのはいろいろ役に立って、経済向きはそれほどございませぬけれど、でも、僕らとしてはそこにしかないという形で見えておりました。ところが、それは第1ページ欠となっていて、その1ページ目もあるのが出てきたので僕らは震えてしまったんですね。これが多分、大袈裟に申しますと、私どもが現代経済史を資料に基づいて研究できるなと思った最初だと思います。

そこで、日本海海戦ではございませぬが敵前大転回ということで、高橋財政期の研究は諦める。資料がないんですから。それで柳行李は幻と消えて、いまでもまだ見つかっていない。追っかけてはおりますが、伊藤先生にも見つからないものが私に見つけられるわけがないと思って、もう相当諦めてます。

そんなことで夏に日満財政経済研究会……これは、石原が満州事変をやって、彼としては大成功という形で満州事変を期に本国に戻って参謀本部に今度は来ていて、それで改めて満州を視察に行くと、ソ連と日本の国境における軍備が全然違う。いま戦争をしたら必ず極東赤軍に関東軍は負けてしまうというのが石原の判断で、それではいけないから、5年間不戦で日本と満州に重工業を建設しよう。特に満州で飛行機を作ろうと。それから、戦車とか自動車とかトラックですね。そういうものを満州で作って、そのためにはその基礎になる重工業も全部作らなければいけないというわけで、その石原構想を作ったのが日満財政経済研究会だったわけです。

軍は石原、政治は近衛文麿、経済は三井の池田成彬。この3人で相談してはじめる仕事だということで、三井銀行の行員であった泉山三六氏が池田成彬の推薦でそこに派遣されて、そこで彼は必死になって情報を集めて5ヵ年計画の立案というのをまずやるわけです。更に戦争が始まってからは、企画院の機密文書などを手に入れては、どんどん筆写で全部写すということをやっていたわけです。その資料が全部出てきたわけでございます。

それが1つで、それだけで政治史・軍事史ではちゃんとした論文になると思いますが、経済史としてはそれだけではちょっと難しいので、私は天の邪鬼というかひねくれておりましたものですから、普通、歴史をやるんだったら経済史といってもやはり明治期までをやるのが当時の常識であります。地主制をやるか、それとも産業革命というのをやるかやらぬかという時代でありまして、それをこんな新しいところをやるというのは相当の天の邪鬼なので、先生は困っておられたんだと思うんです。でも、先生も戦時経済をなさっているわけですから、僕が戦時経済をやることには、この先生だけは反対しないだろうと。

ところが、その先生は、戦時経済というのは物が不足する経済だからというので、物のほうだけ——物資動員と申しますが、物資の動員のほうだけをご研究になった。そこで、物資の動員を先生と同じテーマでやったら負けるのは分かっておりますので、それはちょっと怖いから逃げまして、戦時経済をやるときは確かに物のほうが決定的に重要で、金はどうにでもなるといえばどうにでもなるのですが、でも、どうにでもなるといっても一応、経済の法則はお金の面ではききますので、金融面をやろうと思ったわけです。ですから、満州では満州産業開発5ヵ年計画になり、日本ではのちに名前が生産力拡充計画になるという計画の発端のところ、その生産力拡充を生産力という物的な側面ではなくて、資金的な側面で分析しようということを考えました。

それで、泉山三六資料を拝見しながら日銀に日参をいたしまして、日銀の行員と同じ時間に毎日出勤をいたしまして、これも日銀は最初全然見せてくれませんでした。多分、日銀の歴史資料を最初に見に行った院生が僕だと思うんですけど、吉野俊彦先生という恐ろしい先生がいて、調査局の部屋の入口のところに大きい机がありまして、睨んでいるんですね。それでなかなか入れてくれないんですが、必死になって、これも中村先生とかそういう方のご紹介をいただいたものですから、やっと調査課長の石川通達さんの隣に丸いテーブルを1ついただいて、そこでその資料を見てよろしいということになったわけです。

それで、資金統制を日銀がやりましたので、臨時資金調整法という法律の事務を担当したのが日銀でございます。これは設備投資を統制する法律ですので、きちんと生産力拡充ができるかどうかを根本的な資料で分析できるのは、この臨時資金調

整法だろうというふうに思いました。

でも、そのときにすぐにそう思ったわけではございません。実は前の失敗——数字から筋ができなかった昭和初年の銀行集中で、日本全国の中にはいろんな地方銀行があって、生糸に関係の深い地方銀行、お米と関係の深い地方銀行、繊維と関係の深い銀行、そういうふうな産業金融を知りたかったわけです。そうすると、どの銀行がどの産業にどのぐらい金を貸しているかという統計が欲しいと思って探しておりましたが、どこを見てもないんですね。その頃、出版されていた銀行史の殆ど全部を見ました。これも先生の命令で、中村先生は経済学部にある社史、銀行史を全部読めとおっしゃいました。参りましたが全部、まあ、パラパラとはめくってみました。そうすると、僕の狙いは産業別の融資のデータですが、これがなぜか不思議なことに昭和12年10月以降しかデータがないんですね。なぜだろうと思ったら、12年の9月に臨時資金調整法ができてから産業別の融資の統計が出るようになった。平時にどれぐらい産業に貸していたかを僕は知りたかったわけです。昭和2年から昭和7年ぐらいにかけて。それがどうしても分からなくて、分かるのは12年以降だけだと。なぜだろうとそのときに思っていたわけですが、泉山資料が出てから考えましたら、なるほど臨時資金調整法があるから出るんだということが分かりました。だけど、これはもう平時じゃないんですね。戦時になっているから不確定性原理みたいな形になりますが、戦時になれば産業別融資の内訳も分かる。

そして日銀に行って、何とかお願いをして見せてはくださることになったわけです。ところが、カードもまだ整備されておりませんでしたし、書庫にはもちろん入れてくださいませんし、カードにさわることもしかない。見繕いで出してくださいったものを見るより他はないと。それで、臨時資金調整法のところがいっぱいあるはずなんです。でも、日銀の建物は高橋是清さんが経費を節約して建てて、下のほうには重い石を使うけど、上のほうに行くにしたがって薄い石にして、最後は壁紙みたいに薄いのを張っておけばいいというのが高橋さんの知恵で、それが高橋さんの出世のもとだと自伝にありますよね。ですから、爆撃をやられたら日銀の旧本店はたちまちにして倒壊する。したがって、臨時資金調整法関係の書類は全部エレベーターの穴に放り込んで、エレベーターの穴を埋めて爆風に耐えるようにした。そして、戦争が終わったときにそれを中庭にかき出して、全部トラックで運び出したか燃したか処分してしまったと。それで残っているのはこれぐらいの厚さの資料3冊だけだと言われました。

そして、あのときには写真を撮ることを許してくださらなかったんですね。カメラ持ち込みは絶対禁止でした。ですから、あのときに半年ぐらい日銀に通って、拍子木で最後に閉めるんですけど、拍子木とともに僕も帰ってくるというのをやりまして、その筆写したノートがいまも私の宝物としてあることはあるんですが、ゼロ

ックスもありませんでしたし、湿式コピーという濡れたようなものももちろん許してもらえない。ただひたすら筆写するというので、いまの大学院生を見ると呆れ返りますけれども、それをやっているうちに少しは頭の中にイメージが出てくるといふ効果はあったように思います。

伊藤 その史料は、そのあと公刊されたとかいうことはないんですか。

原 されてません。ただ、『日本銀行沿革史』というものを日銀は必ず作りまして、第1輯は大学図書館に寄付したんですね。それで、第2輯まで寄付されているんですが、第3輯からは秘密で、日銀にしかないんです。私は神保町に出るたびに、相当高いんですけど必ず買うようにして少しずつ集めはしましたが、第3輯第17巻というところに資金調整というのがありまして、そこに一部は引用されているんです。ただ、この『日本銀行沿革史』も、第4輯、第5輯……どこまで行っているのかわかりませんが、秘密なんです。それで、日銀理事の方はお持ちだと思いますから、理事の方がお亡くなりになったようなときに、ちょっと神田に出てくるとかそういうことがあり得るんですけど、これは日銀は大蔵省にも見せませんでした。大蔵省にもやらないというのは面白いですよ。

いずれにしても、そんなことで一応、日銀の資料と泉山資料を併せて修士論文を何とか書かせていただいたわけですが、泉山三六先生から見せていただいた資料が2種類ございまして、ひとつは日滿財政経済研究会がやった5ヵ年計画立案関係の資料集で、もうひとつは、泉山さんがどういうふうにしてやったのか知りませんが、企画院の機密書類を、あれは完全に機密保護法違反ですけども、全部筆写で写したものです。この企画院のものを集めたものを全部編集いたしまして、中村先生とご一緒にみすず書房の『現代史資料』の第43巻、『国家総動員Ⅰ経済』というのに収めさせていただいたわけです。残りしました日滿財政経済研究会の本来の5ヵ年計画のほうは、これも日本近代史料研究会にお願いをしまして、これはタイプ印刷という形で公刊をさせていただきました。これも伊藤先生のお力でそういうふうにしていただけたんですが。

ところが、実は私がみすずの編集者の高橋正衛さんをお願いをしましたのは、『国家総動員Ⅰ経済』じゃなくて『経済Ⅰ』としてくれないかと僕は言ったんです。というのは、『経済Ⅱ』というのをすぐにでも編集できると僕は思っていました。太平洋戦争期の物資動員とか経済統制のことを、これは安藤良雄先生にお願いして資料が出ればいいと。当時まだ私ども経済史の世界は遅れておまして、いい資料を持っておられる先生は他の人間に見せてくださらないんです。それでさんざん僕は困ってましたから、これは泉山さんのご好意で使える形になったので、まず公刊して、それから論文を書くべきだと。その当時は、論文を書いてからもう使っちゃった資料を見せてくれるというのが圧倒的だったんですね。そんなことを僕らはや

りたくないと思って、まず公開して、それから研究。だから、公刊してから用意ドンとやるべきだという議論をいたしまして、それで、みすずから出していただけたんですが、これはさすがの高橋さんが絶対『経済Ⅰ』にはしてくれなかったんですね。『Ⅰ経済』『Ⅱ政治』で（笑）、そのときに出版のチャンスを失ったのをずっとなんとかしようと考えておりました、最近になって、もうお爺さんになった僕がやっと資料を出し始めたということです。

伊藤 それは何ですか。

原 これは、私がいまやっております初期物動計画資料というものです。

伊藤 これは、もとは泉山さんなんですか。

原 いや、泉山さんではありません。大学院の頃から私の研究室にあるのを次々、段ボールから出しては本にして、いまお配りしました最初のほうが最近出したもので、初期物資動員計画資料となっておりますのは、そのあとに開戦期物資動員計画資料、そのあとに後期物資動員計画、そういうふうのひとつの山がこれぐらいの大きさの段ボールになります。実は生産力拡充計画資料というのをまず第1で出しまして、その次に軍需省関係資料を第2期として、初期物資動員計画を第3期ということで、いままでに段ボール3箱分ほどの資料公刊がやっとできました。

伊藤 これはもう出たわけですか。

原 出してあります。

伊藤 第2回配本も終わりですか。

原 ええ、もう終わりです。ここに一応そのもとを持ってまいりましたが、これが第1期です。それから第2期の軍需省関係資料というのがこれです。第3期が初期物資動員計画資料。

伊藤 これいただいてもいいですか。それともコピーを作ったほうがいいですか。

原 どうぞ差し上げます。まだ僕のところにあると思いますから。

私は来年定年になりますので、そろそろ身の始末をしなければいけないのでこういうものを出し始めたのですが、これはあと1年東大にいる間に最後まで完結させようと思っていま一生懸命やっておりますけれど、そのもとにぶつかったのが先ほど言った泉山資料ということで、これは『現代史資料』の第43巻『国家総動員Ⅰ経済』1冊きりになっちゃったんです。確かにものすごくお金がかかったから到底『経済Ⅱ』なんて出してやれないということだったろうと思います。ただし、あれは結構、何回も何回も刷り増ししているんですよ。ですから、あのときにやっておけばよかったなと思うんですが、それができなくていまやっているんです。それもやっと初期物動を去年の秋に出したので、これは1期、2期と2つに分けましたが、一応こんなふうな形で私が持っている資料をいまは次々に、山崎志郎君という若手に手伝ってもらいながら資料を出しているわけです。

伊藤 これは泉山さんのものじゃなくて……

原 これは国民経済研究協会の稲葉さんの資料と、泉山資料と交換に僕らに見せてくれた防衛庁防衛研修所の物資動員関係資料と、そういうふうなものを全部集めたものです。それからあと他にもいろんなところから集めました。

伊藤 他にもあるんですか。

原 はい、他にもいろいろあります。

伊藤 それぞれについてまたちょっとあとでお話ください。

原 そんなことで、戦時経済をやるということになりましてから、もう僕は資料をやるより他に能がありませんので資料を一生懸命集めるということにいたしました。そして主に生産力拡充計画関係と物資動員計画関係の資料があれば必ず手に入れるという主義でやってまいりました。

伊藤 買ったものもあるわけですね。

原 買ったものもあります。

その過程でいろんなところにまいりました。防衛庁のいまは防衛研究所の中に図書館があるわけですが、当時は市ヶ谷台にございまして、そこから私どもが見つけた泉山資料をコピーさせよという要求をされてきましたので、それでは誰にも見せないと言っている戦史部の資料を見せるかと言ったら、見せるということで来いというわけですね。午前8時半に四谷駅に来いということと言われて、ジープに乗ってお迎えが来て、しばらく防衛庁戦史室に通って物動関係資料を見ました。

伊藤 それはコピーさせてくれたんですか。

原 あのときはすぐにはさせてくれなかったけど、結果的には僕はしました。つまり、なぜ防衛庁戦史室に物動計画があるかということ、国民経済研究協会にいた佐伯さんという人が、自分の身柄が防衛庁に移るときに一緒に資料を持っていったんです。ですから、あれはもともとは国民経済研究協会に稲葉さんが集めていた資料の分かれなんです。その国民経済のほうのは、私は結局、最終的には国民経済から何10年もあとになりましたけどいただきました。

原 僕としては早く出したいくてしょうがなかったのが、結局こういうものを出せる本屋さんが見つかりませんで……

伊藤 それで全部、東出版なんでしょう。

原 いや、東出版じゃなくて、現代資料出版というのは東出版の子会社ですよ。1人でやっているところです。

伊藤 赤川氏がやっているやつでしょう。

原 そうです。

伊藤 それが現代資料出版なの。

原 はい。彼は東出版から現代資料出版に行った形になっているわけですね。

伊藤 東出版っていうのは、もともとあれは……

原 日本図書センターです。だから、孫会社ですよ（笑）。というわけで、赤川さんに頼んでいま出してもらっているわけです。

それで、このパンフレットの中の一部を刷りましたのが先ほどお手元にお配りしたものでございまして、物資動員計画と申しますのは皆さんご承知の通り、陸軍と海軍と民間という3つに需要を分ける。供給のほうは、生産だけではなくて在庫の回収とか、いろんなものを掻き集めるだけ掻き集めて、それで足りないところを輸入せざるを得ないから、輸入資金がいるということで輸入計画につながるということなんですが、第1回のきちんとした物資動員計画というのは昭和13年1月から12月までのものということになるんですが、その前に第1巻のちょうど真ん中辺りに『第1委員会報告書』というのがございまして、これが内閣第1委員会という、このときに物動を作ろうとしたところで、12年の11月、12月についての計画といえますか、外貨配分計画とかそういうものが固まって、ここら辺から準備が始まりまして、正式には13年の1月から12月までについての計画というのが本来の計画ということになるわけで、重要物資需給対象及び補填対策一覧表というのがございまして、それが本来の物資動員計画の最初ということになります。ここまでこんなにあるということは多分、皆さんお考えになっておられないんですが、今度僕らがまとめて、資料集はそんなふうな形にしました。

そして、その13年の1月から12月で発足したんですけれど、それが半年経たないうちに輸入力30億円なんてことは到底輸入できないということが分かりまして、急遽改訂せざるを得なくなって、2割縮小という改訂を、第4巻というところにあります。13年改訂物資動員計画というのになります。このときは2割削減ですが、半年経ったところで2割削減ですから影響は、年度後半は実質4割削減に近いものがもろに来ますので、ここでもう国家総動員法を全面的に発動せざるを得ないんじゃないかというような議論が経済面から出てくるわけです。実際には、総動員法はご承知の通りの経過をたどりましてけれども、国家総動員上、この物資動員を徹底的に遂行するためということで、ここで物資動員計画というのが一般の民衆にも知れ渡るようになったと思います。その間に国家総動員会議などいろんなことをやっておりますが、この改訂物動というのが始まったので、日本の戦時経済が非常に厳しい形で始まった。

あとは、昭和14年には物資動員計画以外のいろんな計画を次々に作っていくんですが、1月から12月というとな国家予算と3月ずれてしまうのでやりにくいということで、14年の1月から3月についての経過的な物資動員計画というものをやる。そして、そのあとが昭和14年度物資動員計画立案資料というので、この14年度というのは4月から15年3月までという形で始まる。ところが、途中でヨーロ

ソパ大戦が始まるとかいろんなことがございまして、昭和15年度の物資動員計画に行く。

そして、この昭和15年も例の3国同盟をやるところで、外交方針の大転換に伴って輸入ができなくなる恐れがあるということで、15年の下半期改訂ということを出します。ここは開戦期物動のほうに入れるつもりでこの中には入れてございません。この次のところで開戦期物動の頭は、その15年改訂からやろうかというふうに考えております。

以上が大体、泉山さんのところから集めはじめて、なかなか出せなくて、ようやく最後にあたふたと出している資料ということになります。

そのあとの生産力拡充計画資料もご覧いただきますと、これは日満財政経済研究会のは入れてございません。商工省とか企画院の辺り、さらに軍需省になりますので、そこまでで生産力拡充関係だけ基本的なものを全部入れるとこうなるということで、資料をちゃんとやればもっといっぱい出せるんですが、基本的なものに限ってやろうということで、これを最初にやったわけです。

それから末期については、物動計画の整理はたいへんだらうから、まとまったものだけまず出そうというので、軍需省関係で局長会報という、軍需省の中にさまざまな局がございしますが、その局長を集めて事務連絡をやっているのは、割合に中で誰が何を言ってどうやったかというのがよく分かりますので、その局長会報資料というものをもう公開したほうがいだらうということで、最後に軍需省関係の政策資料というものを、これはばら資料、一種ものが多いんですが、そういうものをコンパイルしておきましたという、そこまでいま行っております。

伊藤 それで軍需省の関係のものは、要するに商工省から軍需省になるでしょう。それで、軍需省が解体したあと、その史料というのはやっぱり……

原 一部だと思いますけど、通産の通商産業史を編纂する資料を集めた部屋などに入っているのもある。たとえば、美濃部洋次の関係資料がいろんなところに分かれて、1つは通産にやっぱりあった。これはあとで僕は分かったんですけどね。

伊藤 そうですか。そういう官庁間の史料の移動を追いたいんですけどね。

原 今度たいへんな行政改革があるので、それをちょっと（笑）。

伊藤 （笑）分かりました。それはちょっと頭に入れておきますので。

原 そんな形で、泉山資料をきっかけにしまして日銀と併せて資金統制と金融統制のほうのことをやりましたのと、それから物資動員につきましては、いちばんよく研究しておられて資料を持っておられたのは安藤良雄先生で、私に「経済史は歴史ですからね」とお叱りをくださった先生ですが、この先生が資料をお持ちのはずだということで、私どもはそれを中心に太平洋戦争期の物資動員計画は分かるなど思ったんですが、先生がご多忙のために結局ご本をおまとめにならなかった。それで、

私がまとめさせていただく形になりまして、そのときに先生のお手元に資料があるのではないかというので探させていただいたのですが、結局それはあまり見つからなかったんです。ですから、これはもとは海軍省から来たはずなんです。というか、海軍経理学校ですけどね。それが経歴にあります。

だけど、僕の判断では結局、服部卓四郎さんが戦争調査会というもので『大東亜戦争戦史を』書かれましたね。安藤先生のお仕事はあの資料とほぼ重なる。それで僕は、先生のご本の資料がその後公刊された資料集のどこにあるかを全部チェックしてページ数まで書きました。ただ、村瀬直養さんの資料を先生がお買い求めになったと思います。

伊藤 それは遺族から買ったということですか。

原 そうではなくて、市場に出たものを買ったということだと思いますね。それは奥様のご意向で私にくださいましたので、これも私の研究室にありますので、この中に入ってきてます。

それで、もうひとつ私がやっておりましたのは、今度は満州国のほうのことをやっぱり調べないといけないというふうに思いました。これは日満財政経済研究会のひとつが満州の5ヵ年計画でした。この点については、東京大学社会科学研究所が十河信二文書というものをもちに持ってこられて、これが主に興中関係の資料だったわけで、満州関係ではないんですけどね。華北関係なんです。だから、後に中村隆英先生が華北経済史をお書きになったときに、いちばんあれが生きたと思いますけど。ただ、僕が満州に行くきっかけを作ってくださったのは、この十河文書であります。それで、興中関係を調べているうちに、どうもその前の満州のことを調べざるをえない。それで東洋文庫にまいましたらば、『立案調査書類目録』という、満鉄経済調査会がそういうものを作っている。これで非常にびっくりして、こういうものがあるんだったらこれを勉強しなければいけないというふうに思いました。立案調査書類というのが全部で418点だったかな。満鉄経済調査会という、満州事変後に設置された臨時の経済調査会が作った資料を全部コンパイルしたというやつです。これを私も神田の古本屋で1冊ずつ買いためて行きまして大体揃えていったんですけども、それがもとになりまして……

伊藤 その東洋文庫には……

原 目録だけあったんです。まずその目録をコピーして、こういうものがあるんだたらどこかで探さなきゃいけないというので、探して歩いたらやっぱりあったんです。それで、1冊そういうものが見つかる次々に見つかるという変な法則があって、知らないときには何も分からなかったものが……

勝村 この目録はアジア財団とフォード財団で作ったんですね。

原 いえ、この満鉄経済調査会の目録で、これは戦前に作ったものです。

伊藤 昭和12年9月刊行と書いてありますね。

原 経緯をお話しますと、要するに、満州事変を始めまして満州国を作ることにする。領有するかどうかという議論もありましたけれども、いずれにしても満州国というものを作っていくときに、経済政策を立案するチームが満鉄の調査部にしかない。それで、満鉄調査部を直接使うのはちょっとまずいので、満鉄経済調査会というものを満鉄に作らせて、この経済調査会の中心に十河信二が座って、後には河本大作が座るんですが、十河がまず経済調査会ということで満州の各産業の統制計画を全部立案していく。それが職制改正で改正されて調査部に戻るときに、この経済調査会でやったものを全部まとめろという命令が下って、北条秀一さんとかああいう方が、これをまとめる仕事をされたと。

伊藤 北条さんもインタビューをやりましたね。

原 やりました。ですから、そういう形でこれはとんでもない調査会でありまして、全体でこれぐらいの厚さのものが400冊近くあるんです。それが全部活字で細かく目次だけを印刷とかいろいろなものがあったんですね。

それで、立案調査書類というのは、満州経済統制方策というのがまず第1巻でありまして、それから農業移民方策、協同組合方策、農業関係とか自動車、金融、関税に至るまで全部あるわけです。それから国防資源調査とか満州一般調査とかありまして、それが東洋文庫で目録が見つかったので、この立案調査書類というのを全部買い集めて……

伊藤 東洋文庫には、その実物は何もなかったんですか。

原 あったかもしれませんが、僕らはこの目録だけ見て、それでびっくりした。それをきっかけに僕が集めはじめたら結構あるなということで、いま完璧に揃ってはいませんが、殆ど集めてきたと思いますね。

伊藤 アメリカに行ったときにも……

原 アメリカに行ったときにもちょっとは探しましたがけれども、基本的には見つかることができたのは日本です。

あと、社研に岡野鑑記先生のもが入って、岡野鑑記文書というのが実は、満州国政府のほうの資料がちょっとあるんですね。これも臨時の調査会みたいなものなんですけれど、要するに、政策スタッフみたいな、調査室みたいなものを作ったときの資料。『調査室時報』というのがあるんですね。それと合わせますと何とか満州のイメージが作れると思いました。

それから、5ヵ年計画をやったのは日産コンツェルンが移転して満州重工業をやりましたので、それで鮎川義介さんのところに僕は行って、たまたま僕は井上（馨）育英会から奨学金というのを頂いた縁がありまして、あれは鮎川さんが縁続きで金を出していたものですから……

伊藤 井上さんが取られたと言ってた（笑）。

原 （笑）そこで鮎川氏のところに文書はないかといったら、もうお亡くなりになりましたが、鮎川金次郎さんはお父様とお2人で派手な選挙をなさって有名になった方ですが、この方が非常にお父さまのことを好きで、一生懸命お父さんの関係を集めていて、それを全部私に見せてくださいましたので、それで満州重工業の内幕が分かって、ひとつ論文を書かせてもらったんですね。

伊藤 鮎川文書はどうなったんですか。

原 鮎川文書は、いまは鮎川家から横浜市史編纂室に寄託されているそうであります。僕はコピーだけ取らせていただいて、鮎川家に全部お返ししました。それで、鮎川家からまた改めてそちらのほうに行ったようですね。いま横浜市史編纂室にあるんじゃないでしょうか。

そんなことがありまして満州関係の資料をちょっと集めようということで、それから例の矢次一夫さんの国策研究所ですね。政治経済をやるというので伊藤先生なんかにもいろいろ教えていただきながら、迫水久常の勉強とか、美濃部洋次の勉強とか、毛里英於兔の勉強とかいろいろやったわけですね。そのときに、美濃部洋次さんのものを矢次一夫さんが預かっているということが分かって、それでしばらく矢次さんの事務所に通って、新国策などを「いやあ、素敵だと」か何とかと言いながら見せてもらったんですね（笑）。ところが、「これは俺が自分で書くから、お前らには見せん」とおっしゃるわけですよ。「ぜひ早く、ぜひ早くお書きくださいませ」と言っていたんだけど、彼は政界秘史は書いたけど、経済史までは書いてくれなかった。

それで亡くなったあと、そういう30年前の縁が生き返りまして、ひとつ東大で買えと。それで伊藤先生のほうにもお願いして、東大5部局連合の予算という名目を立てて東京大学総合図書館に購入していただいて、しかもそれはコンピュータ入力してもらって、国策研究会文書という名前で美濃部洋次資料のいわば本体が、矢次さんが預かっていた部分がそういう形で公開できた。

これはその後大分、経済史の若手の研究者も使ってくれてますし、日本全国どこからもアクセスできますから、そういう意味では図書館がやってくれたので良かったなと思ったんですが、僕は相当あれに勤労奉仕して取られちゃったという感じなんですけどね（笑）。いま入っている箱は全部僕が科研費で作ったものですね。それで、買うまでに3年ぐらいかかるんですよ。完璧なリストを作らなければ国有財産にできないとわけで。あれも本当におかしいんですよ。

伊藤 （笑）本当ですよ。

原 3、4年かかって僕の研究費は全部それにそそぎ込んで、それでやったところが、最後にもう1度コンピュータに入れてと、こういうことになりました（笑）

伊藤 （笑） いやいや、それは大事なことなんですよ。

原 だから、何々他1点、何々に関する全ての資料とか何とかって登録できれば簡単なんですけど、そうじゃなくて1点々々書き出せと。あれは参りましたよ。僕の部屋にいまでもそのときのカードがあって、あれを見るたびに何とも言えない気分になりますね。

いずれにしても、国策研に保存された美濃部洋次資料が、一応そういう形で公開できたのはたいへん嬉しかったんですが、それと同時に今度は、世の中の古本屋さんにはたいへん高いお値段を付ける本屋さんが何軒かありまして、そのうちの1軒から美濃部洋次の満州関係文書というのが出てきて、これは高くても買えなかったんです。それで買っていただいたばかりですから、本当はそれに入れて合わせるのがいちばんいいんですが、ひるんでこれは買えないなと思って悩んでいるうちに一橋に行きました。それで一橋で整理してくれたので、満州関係の美濃部は一橋にございます。それからもうひとつの分かれが、さっきお話の商工省の商工政策史編纂室に結構重要なものがあるんです。ですから、美濃部はそういうふうに分かれたわけですね。でも、ある程度のまとまりとして分かれてますから、一応のフォローはできると思います。

あとお話することはさほどはございませんが、そのあとで私は昭和財政史の終戦から講和までという資料の編集の幹事をさせられました。これで10年以上従事いたしましたので、そのときに大蔵省の資料、これは学部で子供のときに勉強に来た文庫ではなくて、大蔵省財政史室というのがございますが、そこが相当資料を集めましたので、それを全部、大蔵省の先輩にお話を伺っては資料を探すといういつものパターンで大分集めました。

伊藤 文庫とそれとの関係はどうなんですか。

原 一応、別です。

伊藤 谷村裕さんがいたのは、あれは財政史室。

原 財政史室ですね。僕らの頃は舟山正吉さんがいて、それからでしょう。だから、いずれにしても大蔵省の普通のライブラリーという、国会図書館分室としてのライブラリーとは別に財政史室というのがあるわけです。

実はその他に、あまり皆さん御存知ないんですが、大蔵省の地下に倉庫がありまして、そこは金網がかけてあって、各局ごとに資料を入れて、他の局の連中には見せないわけです。主計局は主計局、理財局は理財局。僕はそこまでもぐりこんだ。それから、のちのち訴訟に係わるような資料は絶対大蔵省は出さないんです。

それから、閉鎖機関整理委員会というのがあったのをご存じでしょう。あの閉鎖機関整理委員会の関係の資料は、僕が知っているときには王子の倉庫にあったんです。最初に用賀の倉庫にあって、窓ガラスが割れていて雨が吹き込んだり、リング

箱が割れていて砂がいっぱい入っているという状態で、それが王子の倉庫に移って、またどこかに移したかもしれません。僕は王子の倉庫に通って、これほとんどもない資料なんです。だけど、これは賠償問題、補償問題だから、法律問題があるから絶対見せない。絶対見せないとは言っても僕は見ちゃったんですが、到底処理できる分量ではございませんでした。僕のゼミの学生を3、4人そこに引っ張って行っては整理の検討をつけたんですけど、これはいつの日にどうなりますか分かりませんが、いずれにしても、あることは知っているけど手がつけられない。

伊藤 閉鎖機関っていうのは、別に会社とかそういうものだけじゃなくて、いろんな団体やなんかも入っているわけでしょう。

原 そうだと思います。ただし、それは仕方のない資料もあるんですよ。その閉鎖機関整理委員会が残業したときの蕎麦屋の出前の領収書とか（笑）。そんなのがいっぱいあるんです。もう全部ありますからまいりましたよ。釘抜きでリング箱を開けて砂を払って見ると蕎麦屋の領収書だったりするんです。

伊藤 それはいまでもどこかにあるわけでしょうね。

小池 これは理財局にあると思います。

原 理財局かどこかの管理で、どこかの大蔵省の持っている倉庫。大蔵省っているんなところに国有財産をいっぱい持っているんですね。どこにあるかはいま転々としてますけど、ちゃんとそれをフォローできるんです。

小池 外交史料館の資料を公開するときに、大蔵省の財政史室の柴田善雅さんとずっとお話をしまして、そのときに……

小池 この資料を公開していいですかと言ったら、整理関係の閉鎖機関のものが結構入ってましたから、南方軍政関係で。

原 ただね、僕が見ているのは、この部屋の3倍ぐらいのところにリング箱が……要するに、1つの機関についてリング箱が150箱とかいう分量なんです。

伊藤 1つの機関についてね。

原 小さいところもありますよ。だけど、これはいつの日か誰かやるんだらうなと思って、もう僕は死ぬまでできないでしょうね。

小池 理財局の人と相談をしてこないと駄目だと言っていましたので、理財局が管理しているんじゃないですか。

原 ただね、そうでもないんですよ。そのときは財政史室のルートだけで、僕は理財局と縁がなくてもアプローチしちゃってたからね。ただし、僕はちょっと独特な立場ですから、要するに、昭和財政史のあの時期の編集は偉い先生にいっぱい執筆をお願いしたわけですが、いちばん僕がペーパーだったんで幹事ということだったんですね。それで、幹事は特権があって……

伊藤 幹事っていうのはいいんだよ（笑）。

原 (笑) それでも相当ひどい目にもあったのですけれど(笑)。まあ、恨み言は『大蔵省財政史』の第1巻の折込みに僕はもう既に書いてありますが、要するに、賠償問題とかミスレイニアスをやれと秦郁彦さんが言われたので、まあ、一生懸命ミスレイニアス——特殊財政関係をやったんですね。だから、賠償だけしかまとまった話ができない。

そして、そのときに僕が当然考えたのは外務省で、ところが、外務省は見せてくれないんですね。それで僕は困っちゃって、日本側の資料が全然使えなかった。それでアメリカ側の資料だけで書くわけですが、アメリカ資料もまだペンタゴンが資料を公開してませんでしたから、そうすると国務省資料だけで書く。だから、僕は賠償問題について何100ページと書いたけれど、それは4分の1の資料しか見てないわけです。まず、日本側資料を見てないから半分見てない。アメリカの中で国務省と陸軍省だけだとしても、国務省しか見ていないから半分。他にもアメリカでいろいろな機関、たとえば、国家金融委員会とかいろいろありますが、そういうところの資料を殆ど見ないでやった。

ただ、その関係でアメリカの資料に少しアプローチすることになります。占領期のGHQ——SCAPの資料。これは竹前栄治さんと一緒に占領史研究会というのを僕ら7人がはじめて、当時は7人の侍と言ってたんですけど(笑)。要するに、竹前さんが労働関係からアプローチしたもの、僕は経済のほうからアプローチをするということで、占領期の資料をやっていると結局これはワシントンだということになりまして、ナショナルアーカイブのストランド分館に……いま移っているはずですが、ストランドの分館にあった頃に僕らは行ってスキャップ資料というものをアメリカまで行かなきゃ見られないわけです。それで僕ら占領史研究会の初期の人間は、アメリカに行ってはワシントンのいちばん安いホテル……モーテルといいますが宿屋を探して、そして文書館通いをやって、いちばん安い宿屋に止まった人がブルーリボン賞というのをもらえることになってまして、僕もしばらくブルーリボン賞をキープしていた時期がありました(笑)。

しかし、そんなことをやっていたのではどうしようもないということで、国会図書館のほうにお願いをして、何とかその話をつけて日本に戻すことができないか。については国会図書館のスタッフが向こうに常駐してカードをつくることになった。ストランドにはカードがないんですね。ですから、これは本当に開けてびっくり玉手箱で殆どは煙が出るだけ。当たることは非常に珍しい。私はたまたま留学をその時期に頼んでさせてもらって、車を転がしてワシントンに行っては1週間リサーチをしまして、月曜から木曜まで一生懸命見て、その木曜の夜にコピーを頼んで、金曜日の晩にピックアップして帰ってくるというふうなのを何回かやったんです。頼むたびに段ボールを5、6箱ぐらい開けてくださいとって、全部スクリーニン

グするんですね。ナショナルセキュリティーとプライバシーに抵触しないかどうか。それを全部スクリーニングする仕事に2ヶ月ぐらいかかるから、2ヶ月経ったらまたおいでと。留学しているからそれができましたけどね。それで、2ヶ月の間向こうは必死になってスクリーニングして僕に見せてくれるでしょう。そうすると、僕としては山勘でここにありそうだと思うとやっても当たらないことが結構あるんですね。それですぐ返すと、「俺たちがこんなに一生懸命見てやったのに、お前もう要らないのか」と非常に彼らは怒りましてね。「それはしょうがない。あんたがたがちゃんと整理してないからそうなるんだ」ということを何度も言いました（笑）。

ただ、ナショナルアーカイブと、それからライブラリーコンプレスのアネックスといえますか、要するに日本関係の、たとえば、満鉄ものをいっぱい持ってますね。それは全部、一応触ってきました。触ってきましたというのはおかしいんですけど、要するに、あれは肉体労働ですね。LCのアネックスに行って、大きな段ボールを下ろして開けて、閉めて上げる。それで全部の箱に触ったことは触ったんですけど、結局あまりいい資料は出てこなくてちゃんとした仕事にはなりませんでしたが、一応見ることは見たということをしていただきました。

それで結局、図書館の橋渡しを中村先生が最初に行った頃になさって、その後ちゃんとそれができ上がって、現在は国会図書館で皆さんにご利用いただける形にまできた。あれはたいへん良かったと思っています。向こうにはカードがなかったのをこっちが作ってあげたということなので、あれはいいプロジェクトでありがたかったな。熊田さんとか千田さん・星さんとかいろんな方に御世話になりましたが、あれは僕らとしては、昔その話をいろいろ考えて通そうとしたのは、向こうにもアンドリュー・クロダさんとかいい方がいっぱいいてくださったので話がまとまったと思いますけれども。

あとは、あまり大きな資料の山と私は付き合ったことはございません。その後、有沢広巳先生の資料を私が整理させていただきましましたときに若干いろんな書類がありました。これは東大出版会の石井和夫さんがお預かりくださったものを経済にいまお預かりしております。これは戦後初期の傾斜生産の頃の石炭小委員会とか何かで、あとは稲葉秀三さんの経済復興計画、それから大来佐武郎さんの戦後の計画。これは東大出版界から『戦後初期経済政策構想』という3冊本の箱入りのものにして出させていただいたものの基礎資料を私どもでお預かりしております。

伊藤 それはもちろん全部ではないわけですね。

原 はい。ですから、全部ということになりますと、これは経済安定本部が持っていた膨大な資料集があって、戦後経済政策資料という形で一部もう出てますけれども、あれの整理をした出発点は、中村さんと僕とで勸銀の隣の倉庫に行って紐で縛

ったところからです。

伊藤 中村先生が、もうボロボロになりそうだとか言って心配しておられたあれですか。

原 結局そうです。林健久さんに中心になってもらって、科研費を取ってもらって整理ができてますね。一応、冊子の本にした部分と、しないけれどもリストは完全にできて目録に全部入れてある。

伊藤 そのリストはどこにあるんですか。

原 それは出版した戦後経済政策資料の最後の別巻のようなところにあると思います。ゼロックスコピーだと全部でこれぐらいだったんですけど、それはちゃんと付いております。ですから、戦後初期の資料で有沢さんのをやりまして……

伊藤 要するに、いまおっしゃった有沢さん、それから稲葉さん、大来さん……

原 それから、日銀の中川幸次さんね。ほんのちょっとずつですけど、戦後初期に関係する資料をいくつかご寄託してくださいましたので、それは経済の収蔵庫に入れております。

伊藤 それは見られるんですか。

原 もちろん、もしご希望があれば、大したものではないですけどもちろん見られます。どうぞおっしゃってください。

伊藤 要するに、あそこに行けばカードがあるということですか。

原 カードではなくて、リストを僕が作ったのがありますから、それをご覧くだされば。

伊藤 じゃあ、あそこの受付に行けば目録があると。

原 はい。それで、有沢さんのほうのは本を出したところで一段落させましたので、現在やっておりますのは、脇村義太郎先生のご本の整理を私が、いま経済学部図書館長をやらされているので、その関係で縁ができたんですね。

伊藤 本だけですか。

原 これは本だけです。でも、持ち株会社整理委員会の資料があるはずなんですが、これは逗子のご自宅にある本と、それから日通大船倉庫に預けてあるものと、田辺のご自宅にお送りになったものと3つあるんですね。そのうちいま逗子のお屋敷にあるものしか僕らは見てないんです。ですから、日通大船倉庫の中に持ち株会社整理委員会もあるかもしれない。僕らはお屋敷にあるんじゃないかと思って大分探したんですが見つからなかった。ですから、そんなわけでちょっとまだどうなるか分かりませんが、ただ、計算すると、普通の図書カードをきちんと作ったら7年かからないと整理ができないというほど、あの先生は本が好きでしたからね。

伊藤 お金もあつたんだからね。

原 紀州の木を伐ればちゃんとそれが本になりましたからね。いや、これは有名な

話でして、福本和夫という戦前の福本イズムの人が、戦後になってフクロウの研究とか日本の大山林地主の研究をやって、福本さんの山林地主の中に脇村家というのが出てきますからね。あれは木が本に化けたと。

伊藤 これは将来どうなるんですか。

原 経済学部で頂戴します。

伊藤 本だけじゃなくて。

原 本だけじゃなくて全部。要するに、ご遺族からご寄付の申込みがありましたのは、経済学に関する一切の書籍。それから、上記に関連する一切の資料。これを東京大学の経済学部図書館にご寄贈くださるということで、ご遺族との間でもう話が決まっております。それで、すでに5、6回逗子に、午前9時逗子駅集合とはりきってやっております。（笑）

伊藤 よく9時頃にできるな。私はその頃目が覚めるよ（笑）。

原 でも、そうしないとはかどらないんですよ。4人ぐらい連れてチームで行ってやったんですが、もうあらかた見当がつきまして、その整理のめどが大体ついたのですが、大船倉庫にある分まではまだちょっと手が出なくて、そこにあるかもしれないと。

あと、これはまだ将来いただけるかどうかはちょっと分からないんですが、いま山一証券の社史編纂資料というのを経済学部で手がけ始めております。まず出ましたのが、山一経済研究所の持っている全ての書籍を3億円で売りたいからという話が来ましたが、それはお断りいたしました。というのは、それは殆ど一般の書籍で、あまり買う値打ちがない。ただし、山一が社史編集をいまやっております、執筆委員が何人か私の身近な友人の中にも2人ぐらいおまして、そこで聞くと、そっちはやっぱりできたらもらうべきだと。ところが、これはいま日銀管理下にありますから、日銀といま交渉中のごさいます、学術資料としてそれはきちんと保存したいというふうなことを言っているのでありますが、これはどうなるか、もうしばらく経ってからはっきりいたします。

そんなことで私がタッチしましたのを、ちょっとあとのほうをはしょらせていただきまして、子供のときの話と爺になってからの話だけになってしまったんですが、一応そんなふうなことでいろんな資料を拝見してはきた。ただ、最初に申し上げましたように、きちんとした歴史学の資料の扱いのトレーニングを受けていないものですから、そういう先生方からご覧になるとたいへんでたらめなやり方だということですが、手探りでいままで資料をいじってきたということでございます。

あともうちょっとお話申し上げるとすれば、伊藤先生から経済学部が何を持っているかということについても説明せよというお話でございましたので、ちょっと簡単なメモを作って持ってまいりました。いちばん最後に経済学部図書館所蔵1次資

料というものがございます。これは、経済学部には、資料関係では文書室というものと書庫というのと2本立てになっておりまして、近世文書とかそういうものについては文書室というところで管理しております。その中心がここにあります白木屋文書と浅田家文書と、それから土屋喬雄先生がお買い求めになってお持ちになっていたものの中の資料部分。蔵書は一橋のほうに行ったようですが、鷺ノ宮のお宅に2階建ての大きな書庫がありましたが、その殆どは一橋に行ったように聞いておりますけど、その中の資料部分をいただいております。

伊藤 これは土屋家の文書なんですか。

原 いや、土屋先生のご親戚の家の文書というのものもありますが、土屋家ではございません。土屋先生がお買い集めになった資料ということですけど、その中に一部、土屋家のご親族の近世の資料が入っているというふうに僕は了解しております。

伊藤 土屋先生自身の資料はどうなんですか。

原 それは多分、一橋に行ったんじゃないでしょうか。たとえば、法学部とか明治文庫みたいに系統的にきちんとやりませんで、経済は全く個人的なコネがあったときにだけバラバラに全く分散して入るということなんですけどね。私が存じている限りでは、土屋先生が所蔵されていた資料の中で文書だけを土屋家旧蔵文書という形でやってまして、大体全体の数が3600ぐらいかな。

伊藤 主に近世文書ですか。

原 大体が近世文書で、1つは土屋先生の養母の実家にあたるお家で相沢家というお家がございます、この相沢家文書。これは仙台藩なんですけど、蝦夷地開発にちょっと関係があったり、そこから蝦夷日記とか、主に北海道関係のものがちょっとあったりして、そういうふうなもので相沢家文書というのがそのうちの中心ですね。

その他は大体、いろんな古書店から土屋先生が買ったものだと思いますね。それでいろんなのはありますけど、これはもう本当にばらばらで、まとまりのあるとしてもせいぜい570点というのがいちばん大きいものだったと思いますね。いちばん小さいのでは1点。だから、土屋先生というのは例の労農派の論客でいらしたから、どんなものを見ていたのかというのは多少、研究史的にも面白いことがあるかもしれないんですけども、ちょっとそこまでいま私どものところでは、石井寛治教授がそういうところに時代からいってもいちばんお詳しい。今年ご定年になられますので、この浅田家文書については石井先生が一生懸命なさって、大体ここで整理が終わるところまで来ていて、いま浅田家文書の研究会というので勉強して、研究がまとまったところですよ。

伊藤 白木屋文書目録とここに書いてありますが、これは印刷されたものなんですか。

原 これは僕は見えてないな。文書室に備えつけられているものだから印刷ではないと思いますね。僕は白木屋文書は学生のときに、御家流の勉強のときに商家文書というのはこんな形だということで見せてもらったことはありますが、実際にこれを行ったことはございません。

あとは飛脚の関係のもちょっとございまして、1、2、3、4というところは大体、文書室関係でございまして。

伊藤 これは図書館とは別なんですね。

原 別でございまして。経済学部の2階に文書室というのはございまして、そこに小川幸代さんという人が週に3回来て、この人は近世が分かる女性の研究者ですが。

伊藤 それで整理をしていると。

原 はい、そうです。浅田家文書なんかは、彼女が中心に一生懸命整理をしたというものでございまして。

それとは別に書庫の中に入れていたものが、ひとつは石川一郎文書という、これがいわば近現代の資料の中ではひとつまとまりのあるものでございまして、ここに持ってきましたけど、これは仮目録です。大まかにどんな内容か申し上げますと、ご承知のように経団連の会長を戦後初期にされた方でありまして、その結果として経団連関係といえますか、戦時中からいろいろなお仕事をなさっておられたわけですね。化学工業連盟という辺りの資料が相当ございまして。特に化学工業統制会の資料が相当ありますね。それから、当然そういう財界でいろいろな団体にご関係があったものですから、いろいろな団体、とりわけ戦後になれば経済団体連合会とか日本産業協議会とか、あるいは防衛生産委員会とかいろいろな会議に関連して、石川さんのご経歴に沿った資料が相当ございまして。これは経団連の10年史を編纂するときにコンパイルされたものでありまして、それを私どもの学部の武田晴人教授が経団連の歴史を何回も書いておられますので、武田先生が中心になってそれをまとめてくださったと。これは相当お使いいただける資料だと思いますし、相当利用の申込みも多いものでございまして。僕も時間さえあればそれを使って論文を書きたいのですが。

伊藤 これは1点目録ではないんですね。たとえば、アンモニアならアンモニアという項がありますけど……

原 そうです。その中にまたいろいろあるわけです。ですから、あくまでも仮目録で、これは武田さんが全部入れるところから整理のところまでやってくれました。

伊藤 これをお借りしてコピーをしてもいいですか。

原 どうぞお使いください。ご活用いただければ幸せに存じます。

あといろいろなものがございまして、日本製鉄が歴史を編纂しようとしたときに、

これは日本製鉄株式会社という時期がございました。その頃の歴史編纂のためにコンパイルして、生資料がたくさん書庫の中に配架してございます。

伊藤 これはどこから入ったんですか。

原 これは買ったんですね、山田盛太郎先生の御依頼で。戦後、日本は鉄でもつというのが山田理論でありまして、鉄鋼業研究会というので大分、山田先生のご要望ということで僕が名義人になって買った資料がたくさんあって、それで大体揃っていたというわけです。

伊藤 どこから買ったんですか。

原 市場だと思いますよ。市場に出るたびに買われていたと。

伊藤 新日鉄が大分持ってるけどな。

原 そうです。ですけど、そういうのが不思議に出てくる。もちろん新日鉄のほうと突き合わせなければ十分ではありませんけど、相当の分量があります。

それから営業報告書は、これは工業倶楽部から寄付されて、これまでは営業報告書を全部揃えて持っているのでいちばん素敵なコレクションは神戸大学に、あれは神戸高商のあとですから、神戸大学の経営文献センターがいちばん持っていて日本一と言っていたんですが、今度それを我々が追い越して、これも武田さんが大分頑張ってくれて、寄付もしてもらい整理しました。

伊藤 これも目録があるんですね。

原 あります。これは立派な目録が作られました。そしてこれは多分、可読形式にしてコンピュータで整理したと思いますね。いずれにしてもこれは相当貴重なコレクションといえればコレクションであります。

伊藤 目録として外に出ているということはあるんですか。たとえば、東大図書館にこの目録が入っているとか。

原 と思いますけどね。届けてあると思いますけど、これは冊子にして作りましたから。そして多分、パソコンでも読めると思います。

伊藤 どこに行けばパソコンで読めるんですか。

原 ネットに乗っけてあればネットで……

伊藤 どこに入ればいいんですか。

原 東大図書館から経済に入って……

伊藤 東大図書館から経済には入れないでしょう。

原 いや、入れますよ。大した窓は出してませんが、大判小判の絵をちょっと出したりしています(笑)。いずれにしても、あとそこにありますようにいくつかの資料がございまして、断片的ですけど、たとえば、過燐酸関係資料なんていうのは、こんなふうな形のものが何冊かあって、それで中を開けるとこんなふうになっている。これが過燐酸同業会とか、人造肥料連合会とか、そこら辺の資料ですね。

あと塩業関係資料というのはこんなふうな形で、これは寛政12年——1800年の下総の国葛飾郡行徳領の塩業関係の文書ということですね。

伊藤 葛飾郡というのは海だけ。

原 行徳とか浦安とか、まだ塩が採れたわけですよ。

それから三菱関係というのは、三菱経済研究所が整理した戦前・戦中のものを私どもにいただきましたので、これも整理して置いてあります。

それから横浜正金関係の、これは長らく東洋文化研究所にありましたものを少しずつ整理を進めております。

僕が知っているかぎりでは他にもいくつかありまして、たとえば、日本通運の小運送関係の資料が相当あります。というのは駅から家まで、要するに、いまで言うところクロネコヤマトですね。それを昔は日通ってというのが駅の隣にあって、それが小運送をやっていた。この小運送業者を戦時中に全部まとめて作ったのが日本通運という会社になるでしょう。その小運送関係の資料というのがちょっとあったと思えますね。

他にもいくつか、たとえば、井上馨の関係文書というのが、この間、古本屋に出たのを買って、少しあれですけど持ってきました。これが、世外井上馨公伝の原稿の一部です。赤で直してあります。

あと、これは銀行学伝習人規則、その他諸々とか。これは各国の貨幣にどんなものがあるかを明治のはじめに調べたものとかですね。こんなふうなものとか薄いものだけ持ってまいりました。変なものがあるときにはなるべく買うというのが僕の方針で来たんですけど。

伊藤 これは購入ですか。

原 これは購入です。石井寛治さんが見つけて、「じゃあ、買しましょうよ」というのは僕です（笑）。

伊藤 経済学部っていうのはお金があるんだな。

原 いやあ、ありませんよ。ありませんけれども、頑張るときには頑張るという主義で（笑）。経済は各先生方の研究費一切お渡しせずに全部プールして、その中の3分の1は絶対本を買うということにはなってますので、その点では図書予算は総合図書館の購入予算よりは大きいです。だけど、お金があるわけではありません。

というふうなことでございまして、最初から最後まで崩れっぱなしのお話でたいへん申し訳ありませんでした。

伊藤 いやいや、聞いたことのないようなお話ばかりいっぱいあって驚きました。

原 そうですか。伊藤先生は全部ご存じのことだと思っただけけれど（笑）。

伊藤先生はよくご承知のように、私はさぼるだけの人間で何も仕事をしないものですから、殆どまともな資料らしい資料をきちんと見てきませんでした。最後の

罪ほろぼしにこのシリーズを何とか続けていこうと思っておりまして、いまのところは生産力拡充計画、軍需省の次に初期物動をやりましたから、開戦期物動というのをやって、それから後期物動というのをやって、そこら辺で一段落かなと思いますが、そこがどこまで行けますか。多分、この初期の後半は4月になってからじゃないとできないと思いますから、開戦期物動ぐらいで僕は戦争終結を見ずに敗戦しちゃうかもしれないですね。

伊藤 この山崎さんがパートナーなんですか。

原 ええ。山崎君が僕の次に戦時経済を専門的に研究テーマに選んでくれたので、山崎君と僕とでやるということで2人でやっております。昔、中村先生にお願いして2人でやらせていただいたんですが、そんなことで先生には推薦文のたびに御世話になっております。最近仕事をしてなくて、恥ずかしくてあまり中村先生にもお目にかかってないんですけど（笑）。

ということで、たいへん崩れた話で、せっかくご貴重な時間をお耳を汚して恐縮に存じますが、この前、伊藤先生からご下命いただきました件につきまして、ご奉答は以上のようなことでお許しく下さいませ。

伊藤 いやいや、恐縮の至りでございます。ちょっと圧倒されました。皆さん何かご質問をどうぞ。

原 何でもおっしゃってください。ただ、もう大分ぼけておりまして（笑）、きちんとしたお答えができるかどうか危ういものですが。

伊藤 原さんはご定年までどれぐらいあるんですか。

原 1年でございます。来年定年です。

伊藤 来年の春ですか。

原 僕は3月のはじめに生まれてますんで、来年で。

伊藤 そうすると、それまでにこれとかその続きを出しちやおうということですか。

原 と思ってたんですけど、ただ、ちょっといまのペースだと開戦期で切れちゃうかもしれない。そしたら、そこまでいったら辞めてもちょっとは頑張っ、赤川さんが頑張ってくれば後期までは行こうと思ってますけど。要するに、これが売ればいいんですけど、なかなか売れないんですね。大分それで彼は弱っているみたい。だから、僕もハラハラしながら、開戦もできずに敗退するのは嫌だなと思っているんですが。

伊藤 あそこは赤川君1人でなんですか。

原 女性の方か何かいらっしゃいますけどね。

伊藤 ちょっと他の企画をいろいろ考えていて赤川君のところに行ったら、「いやあ、もうこれがあるものですから、とにかく他のことは絶対できません」と（笑）。

原 申し訳ありません。ただ、伊藤先生のほうが儲かるはずだから、そっちで儲けていただいてこっちを何とか続けて……

伊藤 いやいや、こっちのほうもあまり儲からない仕事だったもんで（笑）。

僕は鮎川史料はね……

原 あれは面白かったですよ。

伊藤 金次郎さんが何か変な格好で現れて。

原 面白い方でしたよね。とてもお父様を好きだから、週刊誌の記事から何から鮎川義介とあると全部ファイルしておられましたね。僕は全部拝見させていただいて、まあ、僕が使えたところはその満州重工業関係のところだけですけど。

おかしい話で、あれはあのあとやってくれる人が経営史学会で何人かいたんですけど、全部話が繰り返しになっちゃうんですね。だから、一昨年、初めて長春で研究会があって行ってきましたら、「原先生の25年も前の論文が」といわれて（笑）、すっかり僕は老人になりまして、結局そのあとないんですね。そこら辺の資料を使った研究というのが結局見つからなかった。だから、僕がすでに見た資料を細かく議論して、僕はそんなに資料価値ないと思って4、5行で切ったところを延々と何時間かの報告にした人はいたけど、あまり意味があるわけではなくてね。

資料というのは本当に怖いですよ。私は偶然にも泉山資料と遭遇することができたということがありますが、これが遭遇していなかったら全然、何せ敵前大転回でテーマを戦時経済に変えたわけですので、本当だったらまだあの柳行李を追っかけて、こういうことにはなっていなかったかもしれない。だから、運が相当ありますね。ただ、伊藤先生がなさるようにきちとなされば、どんどん資料は出てくるといことだと思えますけれども。僕らは全く偶然だけでやって、それでインタビューするのも途中で息が切れてしまって、ちゃんと継続できなかったものですから、これは申し訳なかったと思っています。もうちょっと経済畑の人の話を聞いておかなければいけなかった人が何人もいらっしゃったんですが。

伊藤 それでもおかげさまで少しはいろんな人の話を聞いた、それが残ってますよね。

原 はい。これは本当にありがたかったと思っています。

これが開戦期とか後期のもとになる作業リストです。だから、終わりのほうに出典といいますか、要するに、識別の番号をちょっと入れてあります。

伊藤 柏原とか。

原 それは、憲政資料室の柏原兵太郎文書。あれの中に物動関係が相当あります。

伊藤 あれは古川君がやったやつかな。

原 だから、まずそういう形でいろんなところのをそういうふうにして寄せていったリストを作りまして、どれを入れるか入れないかを山崎君と二人で選定して編集

します。

伊藤 この高橋資料っていうのは。

原 これは海軍の関係の高橋甫さんですね。海軍関係の資料で、兵備局の主計少佐、これは安藤先生が手がけられた資料です。

伊藤 村瀬直養のも随分ありますね。

原 ありますでしょう。村瀬さんのは市場に出たのを安藤先生がお買い求めになって、奥さんからお預かりした。全部そういうものは、整理が進めば経済の文書室に残しておこうと思っているんですけどね。

伊藤 日高っていうのは鉄ですか。

原 そうです。産業政策史研究所というのが通産の外郭団体でございまして、そこにある資料だと思います。

伊藤 いまはどこにあるんですか。

原 いまもそこにあると思います。僕らはコピーをとらせていただいているだけということだと思います。

伊藤 結構そういうところにいろいろあるんですね。

原 あります。山崎君と僕は相当、そこら辺の物動とか生産力拡充をいろいろ集めまくりましたから。それで、彼は前に福島大学にいましたので、福島大学にも少し彼が買ったものが残っているはずです。

伊藤 この福大と書いてあるのはそれですか。

原 そうです。それは山崎君が福島にいたときのものです。

伊藤 福島大学の図書館ですか。

コレクションとしてまとまっているかどうかは。

原 いや、それはまとまってないと思いますよ。

伊藤 中に入れちゃっているんですね。

原 と思います。

伊藤 この別録って書いてあるのは、これは公文別録ですか。

原 公文別録で、石川準吉著っていう感じですね（笑）。あの公文別録も最初に僕らが見せていただいたうちの1人だったと思いますけど、あの文書館ができたかできないかのところで。

伊藤 この集成っていうのは、大東文化のやつですか。

原 そうですね、ですから、いろんな公刊資料に載っているものも含めて全部、日付が分かる限りは日付順。日付が分からないのはその年でという、テナティブなリストです。これがこういうもののもとになっているということですね。

伊藤 いやあ、これはすごいな。これを作るのはたいへんだ。

勝村 脇村先生はどこに山をお持ちだったんですか。

原 脇村家というのはもともと大阪の薬の大きな問屋さんで、和歌山の田辺に大きなお山をお持ちで、脇村林業部というものがございまして、そこで管理しておられます。それで、ここから先は僕らの噂話というか伝説ですが、先生がご買い求めのときは、木を1本伐るとどんな高いものでも買ってしまうということで、紀州の木が化けたのが脇村先生の文庫だということですが、何といたってもご本がたいへんお好きな先生でしたので、『東西書誌街考』なんて岩波新書で書かれましたけれども、日本の古本屋、東京の古本屋、京都の古本屋さんをよく調べて、それからロンドンに行きますと例のフォイルズという有名な本屋さんの2階に泊まっていたんです。

伊藤 上客なんでしょう。

原 上客なんです。あそこのランチョンっていうのは、ミスター・ウインストン・チャーチルも講演したなんて、そういうイギリスのエリートの中のエリートの集まる本屋に鑑札なしで出入りできて、そこに泊まっていて上客だったという人ですからね。

伊藤 海事産業研究所というんですか。

原 あそこずっとご関係がありました。ですから、今回も脇村先生のご本の中で、海運関係は海事産業研究所に、石油関係は石油連盟にというお話も最初あったんです。だけど、それを誰が分けるかということになると誰も分けられないので、それで結局のところ私どものところにくださるということに。最初は「玉石混淆だよ。400冊ぐらいだよ」ということを取り次いでくださった名誉教授がおっしゃったので、「それならいただきますよ」と僕が言ったのが運のつき。数えてみたら2万3000冊。名誉教授の先生はちゃんとご覧になりに来て、それで500冊とおっしゃったんですよ。それで、僕がちゃんとOBの図書館のプロと一緒に行って数を見ましたら2万3000冊でありました。そのうち、お屋敷に残させていただくものと運んでチェックするものとは振り分けて、いまのところ1万3000冊をまず第1期で運ぼうと言っているんですが、これを整理するのをまともにやりますと7年かかります。それでカード作りをはしよらせていただいて、コンピュータ入力だけでやっても5年かかりますね。何とかそれを3年で人海戦術でやることができないかと思っているんですが、僕がもうあと1年しか大学にいられませんから、1年でどこまで行くかでちょっと検討をつけて、あとは程々にと考えてますが、脇村さんのと、それに山一が重なってきちゃったから、ちょっと青くなってるんですけどね。どうなりましょうか。

伊藤 海事のところはやっぱ、いろいろ資料を持っているんですかね。

原 と思います。僕は行ったことがないんですけど、いま図書館では、戦時中の海運造船の歴史をまとめる資料編纂の基礎資料というものがなぜか古本屋に出てきまして、それを買って整理しているところなんですけど、だから、戦時海運資料と

いうものももしあれであれば、これの物動が終わったあとに作ることはできるかなと。それぐらいの分量は整理をいま進めつつあります。

伊藤 それはどこのものですか。

原 何か分からないんですけど、戦時海運史編纂室とか何とかっていうものなんです。どこだか分かりません。だけど、いずれはちゃんと中を読んでいけばだんだん分かると思いますけど。

伊藤 それは古本屋ですか。

原 古本屋です。ですから、古本屋も馬鹿にならないんですよ。昔々僕が古本屋で買っていちばん素敵だった資料は、これは中村隆英先生に申し上げたら、喜んでご本で使っていただけた資料ですけどね。『命により一部お届け申し上げ候、迫水金融課長、吉野信二殿』って。『賀屋大蔵大臣の名により一部お届け申し上げ候』迫水って判子があって、『吉野商工次官殿』と。要するに、財政経済3原則、賀屋・吉野3原則の基礎資料です。古本屋はもうなくなりました明治堂で、いまドトールコーヒーですけど（笑）。明治堂で2000円で僕は買いました。2万円でも僕は買いましたけどね。

伊藤 いまおっしゃったのは送り状でしょうけど、それは中身があるわけですね。

原 それがぺたっと貼ってあって、これぐらいの厚さなんです。そこの基礎資料は誰も見たことがない、どこでも見たことがない、財政経済3原則じゃなくて、実は9原則か10原則あったんです。そのうちの3つにまとまっていくプロセスが全部載っていて、中村先生に見せたら「これ俺の本で書いてもいいか」と、「どうぞ、どうぞ」と（笑）。

伊藤 大分貸しができたわけですね（笑）。

原 先生は喜んでくださったんですよ。「よく見つけた」って言ってね。僕も嬉しかった。

というわけで、安藤良雄先生、中村隆英先生、両先生にご指導いただきまして……といたしますか、特に資料についてはやはり伊藤先生はじめ政治史の先生方はぐんぐん驀進しておられたので、それにちょっと後からついていっていろいろ教えていただき、たいへんいろんなご便宜もいただきまして、こんなところまで来れたと思って、ありがたいと思っております。

伊藤 すごい作業ですね。

原 坂井雄吉さんが、結城豊太郎のものを取りに、くっついて行ったんですよ。そのとき試験されまして、巻紙を読めるかと。僕は完全に落第（笑）。たいへんでしたよ。山形まで車で行く間こうやって試験を受けて完全に落第。それで結城家にあったお手紙が柳行李3つにいっぱいございまして、それは坂井先生の試験で汗をかきました（笑）。

でも、それやこれやで、僕らの頃は技術から見ても面白かったと思いますね。我々は写真機をもって、オリンパスペインFというのを僕は使っておりまして、これはミニコピーというフィルムでハーフサイズで36枚撮りに72コマできますから、このオリンパスペンを持っていっては撮ると。そのフィルムは真っ黒な地の中に真っ白にきちっと剃刀で刻んだような字を出す。そういう技術を身につけさせられたんですね。いまや完璧に陳腐化して足踏みシャッターで、じゃんじゃんみんな撮るでしょう。だけど、みんなネズミ色のネガですよ。昔は真っ黒の中に真っ白という、そういうトレーニングをされた。それで、ゼロックスがなかったでしょう。湿式コピーとかカーボン紙で2枚複写とかですね。そういうのでやった時代から始まって、いまに至るまで随分便利になったと思いますし、ゼロックスがこんなに便利になるとは思いませんでした。あとはテープレコーダーもどんどん小さくなっちゃってますし、あとは計算機でしょうかね。タイガー式計算機という、私はその前の算盤なんですけれど、ガラガラチンというやつで。

伊藤 中村先生がこんなでかいのを机の上において一生懸命計算してましたけどね。

原 ダダダ…ダダダッとね、部屋中揺れるような計算機なんです。「電動計算機なんて格好いいな」と。(笑)

伊藤 (笑) それ自体歴史になっちゃったんですね。

原 そうですね。

伊藤 季武君どうですか、ご質問は。

原 崩れた話なものですから、ご質問のしようもないかと思いますが(笑)。

季武 さっきの微妙な出典を伏せたような資料というのは、さっき先生が示されたリストを見れば分かるんですか。

原 いや、それはいろいろありますが、一応、資料仲間の仁義のようなものはきちんと守らないと、あとの人に迷惑をかけますので、そういうことはきちんとやってはいるんです。ただ、僕の理解では、やっぱり難しい方がいらっしゃるところが微妙になるということです。つまり、資料としては、お持ちになっている方のご了解があれば問題はない。ご了解を得ないところは問題がある。ところが、お持ちになっているところが個人であればそれほど問題はないのですが、機関であるときには担当者がお代わりになりますと、前の方が快くご了解くださったものが、次の方にご挨拶すると駄目になるというケースを僕は何度も何度も経験しております。それで、駄目になったものは僕は使わない主義ですから、それはそれで自分としては筋を通しているつもりなのですが、ただ、若干、微妙かなということはやっぱりときどきは感じますね。ですから、そういうときはなるべく慎重なほうで対処させていただくというのが僕のいままでの……つまり、僕がいにしても、まずいことをや

りますとあとの方にご迷惑をかけることになりますから、それは絶対にしないというのが僕のルールだったんです。だから、これは何って全部出せばいいんですけど、図書館がいろいろたくさんあって、いろんな個性をお持ちの方がそういう資料管理にあたられるときというのは、やはりなかなか難しいときがあります。

たとえば、日銀資料の開け方だって、僕が行ってああいう形で何ヶ月か日参したんで何とか日銀が開いてきて、最近日銀は随分よくなったんですね。金融研究所を作った辺りからどんどんよくなって、これもあちらで武藤さんという方が一生懸命、資料公開に内部で尽力してくださったおかげで僕らはできましてね。ところが、その方がいなくなればまたちょっと話は変わるわけです。そこら辺が微妙だということで、武藤さんにご迷惑をかけてはいけないし、それから、あとから来る新進の研究者に迷惑をかけてはいけないわけなので、だから、微妙なことは微妙なままに、なるべく安全なほうで落ち着けるとというのが私の基本的なやり方だったんです。いままでお叱りをいただいたことはないから、今度もなんとかすり抜けられればいいなとは思ってますが。

伊藤 そうですね。僕もいろいろ危ないものは扱いましたが、トラブルになるということとはなかったように思うんですね。

原 それは心掛けの問題として、これからあとの人に迷惑はかけられないということがございますので、ざっくばらんにもっと微妙な中身のご説明もできるのですが（笑）、それはそれで申し上げないほうがよろしいかと思っております。

伊藤 官庁が持っている文書ですね。これは非常に厄介な問題でして、これから情報公開の問題が出てくると、またちょっと状況が変わるのかもしれませんが。

原 良くなるか悪くなるか分かりませんね。

伊藤 どっちに転ぶか分からないところがありますからね。

原 諸刃の剣だと思いますよ。

勝村 日銀の上海支店なんかの文書はどうなっているんですか。

原 日銀のは聞いたことがございませんが、中国の資料というのがまたこれが厄介でございまして、（トウ）案館にあるという噂を聞いたことがございます。

勝村 第一（トウ）案館ですか。

原 はい。ただし、それは確認したわけではございません。

勝村 上海日銀の。

原 多分、上海ですね。という噂は聞いたことがありますが、確認したことはございません。それから、横浜正金銀行の資料があるというのもですね。

それで、中国はいろんなところでいろんな先生がそれぞれの資料を管理しておられまして、どの先生にお願いして伺うかによって、見られる資料と見られない資料が同じところでも全く違って、ある先生にお願いすると別の先生のほうのは一切そ

の後見られなくなってしまうというケースが多いんですね。実は先ほどの長春の会議のときにも、ある先生のところに行きましたら、他の先生のほうのは全然私どもには見せていただけないということになるわけで、これは日本社会と中国社会が少し違うことの1つの例かなとは思っております。本当はそういうのを全部調べなきゃいけないんですけど、アジア経済研究所の井村哲郎さんがこの前、1940年の東アジアのところで資料の解題をされましたので、井村さんが少なくとも東北関係についてはいちばんよく御存知だと思います。上海まではご存じかどうかちょっと分かりません。

小池 上海は久保亨さんがお詳しいんじゃないでしょうか。

原 久保さんとかね。だから、何人かそういう詳しい方のところで情報がある程度あるかもしれません。ただし、すぐに利用できるかどうかは分かりません。僕は「北京にある資料をお前に見せてやるから半年でも1年でもいないか」って言われたんですけど、ちょうど忙しい時期に言われて、要するに、中国連合準備銀行での話を少しやろうとか、あるいは、難しいテーマだけど（ヒ）東密貿易の辺りがやっぱり気になるから、あの辺りをちょっと調べようかと思っていたことがあって、最初は（ヒ）東密貿易とか（ヒ）東政権のあたり、興中公司とか満州事変から日中全面戦争期に移行するプロセスのややゴタゴタしたところがいちばん面白いんじゃないかと思って、伊藤先生、あれいつでしたっけ。中村先生と3人で華北をやりましようなんて言ってて、結局、僕は満州に出ちゃって、中村先生が華北をなさってということになって、あれがやっぱり十河文書とか何かいろいろと教えていただいた頃でしたね。ですから、（ヒ）東政権とか（ヒ）察政務委員会とか、あそこら辺のところは政治で見ても面白いし、経済でもやっぱり相当面白い。珍しいですからね、公然と国家が密貿易を奨励したっていうのは。自由貿易とか言ってましたけど。

伊藤 （笑）あのとときに十河さんのインタビューもやりましたね。

原 はい。いろんなことをしたんですけど、僕がちゃんと仕事をしなかったものだから、消えちゃって申し訳なかったですね。でも、十河さんのあとを河本大作がやっているというのは面白いですね。

伊藤 そうですね。どういう関係になっているのかな。そうだ、今度あれをちゃんと読んでみなきゃいかんな。

小池 ススキガハラに何とかっていうあれですね。

原 僕も泉山資料にぶつかった出発点は神田の古本屋で、『トラ大臣になるまで』という泉山三六さんのあの本をぞっき本で確か50円だったかで手に入れて読んだら、さっきの日満財政経済研究会の話があって、それで泉山さんに会った。だから、『トラ大臣になるまで』のおかげで僕は30年から40年、結局いまでもやっているわけですから多分、『トラ大臣——』のおかげで30年食わせていただいたことに

なりますよ。

伊藤 あれはいま教養にあるわけですか。

原 教養です。総合文化研究科だと思います。

伊藤 あれは目録はあったんでしたっけ。

原 ありますよ。作りました。ですから、日滿財経で出版していただいたので、それで直接の生のは見なくてもいいことに相当はなったんだけど……

伊藤 全体の目録はどうしたんでしたっけ。

原 ありますよ。あそこに添えて置いておきました。

伊藤 脇村さんはたくさん資料を持っているだろうと思うんですね。

原 思いますよ。河上肇さんのものを集めているんですね。というのは、脇村さんが最初に京大の河上肇に憧れて京都行こうと思った。それで、河上さんと脇村家はお付き合いがあったらしくて、行ってどうしようかと相談したらば、脇村さんの顔を見て、「お前はあまり政治には巻き込まれそうもないから東京に行ってもいいだろう」と河上さんがおっしゃったと。それで東大に行ってああいうことになったんですけれど（笑）。ただ、それにしても河上さんについてのものはいろいろたくさんお集めです。それで、東京河上会という会でいろいろなあれもなさいまして、ですから、まとまったものとしては河上肇関係のがあると。

伊藤 脇村さんは回想録を書かれて、それで僕が何か書評を書いたもので電話がかかってきましてね。

原 1時間ぐらいですか。

伊藤 いや、1時間どころじゃないです。あれは夜遅く電話がかかってきて（笑）、それで自分の生い立ちから何からいろんなこととお話になりまして……

原 それはご苦労さまでございました（笑）。

伊藤 いやあ、非常に面白かったですよ。

原 そうですか。たいへんなんですよ、脇村先生のところにお電話すると（笑）。

伊藤 それで、「きみ、こういうことについてどういう文献があるかね」というお話で、「いやあ、きみのものを読んだけど、あれに出てくるこれは何とかだ」とかいう話で延々話がありまして、最後はもう「脇村先生からお電話です」というと、すぐ座蒲団を持って（笑）。

原 そうです、必要なんですよ（笑）。僕も脇村先生というと椅子をちゃんと持って椅子にかけて、まず1時間は覚悟します。あとは何時間まで行くかは分かりません。1時間は絶対かかりますね。

伊藤 それでやっぱり紀州の山の話も出ましたしね（笑）。木を売ればいいという話も出ました。

原 脇村先生が最後にしておられた仕事は、実は有沢先生がなさった秋丸機関なん

です。それで、秋丸機関の英米合作抗戦力調査というのは焼いたと言ったけど、有沢さんのところから出てきたんですね。これは中村先生が喜んでテレビに出したでしょう。それで、脇村さんの家を整理していたら、武村忠雄さんのやったドイツ抗戦力調査がやっぱり出てきました。そのことは脇村さんは前に喋っているんですね。学士会会報だったかな。それで、ドイツのは出てきました。だから、陸軍省主計課別班の秋丸機関のは、大体これで2つ基本報告が出てきたんですね。その関連資料で翻訳とかいろんな資料は4、5冊出ましたね。去年、秋丸家に行ってきたんですよ。それで、つづら1箱出てきたから見てくれというからすぐに行って、法学部の助手の方と競争になっちゃって、あちらはお怒りだったようで申し訳なかったと思うんですけど、僕のほうのが飛行機で飛んでいっちゃったから早かった（笑）。主に法律の勉強とかそういう関係の資料であまり役に立つものはなくて、基本なものもなかったんですね。

ただ、戦争末期のあの交通困難な中をよくあんな大つづらをえびのまで運べたと関心しました。つまり、仕事関係のは陸軍省に置いておられたんです。それで、家にあつた本を送った。そうすると、儒教の本とか法律の本とかいろんな本がありましたけど、何冊かはいただいはきたんですが、それはあまり主計課別班自身に変わるものはなかったんですけどね。いずれにしても、それについての報告を日本学士院で脇村さんがなさって、その原稿を起こして、いま大内力さんが整理して、今度の日本学士院の会報に載ります。

伊藤 学士会ですか。

原 学士院です。学士会でも喋ったことがありますけど、学士院のほうでやったのが今度、日本学士院報に載ります。

伊藤 何か最後の頃に、「学士院でその話をする必要がある。学者と政治という話なんだから、お前のやつを読んでいたらいろんなものが出てくるから、いろいろ聞きたい」という話で……

原 それは狙いどころはいちばんいいですね。伊藤先生に目をつけるなんていうのは（笑）。

伊藤 「何で俺はいままでお前のことを全然知らなかったんだらう」と（笑）。

原 それはやっぱり経済学者の視野が狭いものですから（笑）。

伊藤 それでまた僕はいろいろ言われて、それでいろんな話をして、それで「学士院の会報にいずれ載るから、載ったら必ず送る」と言われたんで、それで僕は待っていたら、亡くなってしまわれたので、これはもう駄目だなと。

原 大丈夫です。最後にお話になったテープを起こして、大内力先生が全部一生懸命まとめられて。面白いですね、あの頃の先生方っていうのは。大内力助教授は脇村教授に毎年クッキーを送ってますね。まあ、資料をやるときの……何というんで

しょう、あっ、こういうことがあるんだというような（笑）。

伊藤 本当ですよ（笑）。

原 本当に申し訳ございません。何か伊藤先生がいらっしゃると、ついこういうふう
うに甘えた口調になるものですからね。

伊藤 いえいえとんでもありません。実は科研費をもらいまして、いまコンピュータ
タの上で日本近代史料情報館みたいなものを作ろうかというプランニングをやっ
ているんです。それでいろんな方からお話を伺っておりまして、目録や何かをそこ
に打ち込みたいんですが、目録というのは著作権があるのかないのか。それから、
目録を打ち込むことについて所蔵機関の許可を得る必要があるのかないのかとい
うようなことがいろいろありまして、これはちょっと研究しなきゃいかんというこ
とで、会員制でクローズドな部分と、それからある程度表に出せる部分と区分けし
ているんですよ。それでメンバーシップ制を作って、その研究会の形でこれをやっ
ているわけなんですけれども、来年まで一応、科研費をもらってますので、よろし
かったら原さんもメンバーになってくださるといいなど、こう思っておりますが。

原 そうですか。それは大事なお仕事だと思いますけど、ただ、僕も最後の年だか
らジタバタしていて、ちょっといま……

伊藤 いやあ、ジタバタでいいですよ。

原 きょうもこういうふうは何の準備もいたしませんで、きちんとしたご報告もで
きなくて申し訳ない。

伊藤 ご案内を差し上げますので。

原 でも、この一年は多分、ご迷惑をかけるだけかもしれません。

伊藤 多分そうだとは思いますが、一応ご連絡だけ差し上げますので。

原 はい。いつも先生のあれには、ご連絡いただきながら何度もご都合できません
で、誠に申し訳ありません。いつも不義理を重ねているので。

伊藤 いやあ、非常に面白かったです。こんなすごい情報があるとは知らなかった
です。

原 図書館のPRは私の役目でもございますので、どうぞご利用いただければあり
がたいと思っておりますし、この資料のほうもしかるべくご覧いただければと思
います。どうもありがとうございました。（第4回終了）